

# 富山如大地

— 第135号 —

発行人 亀渕 卓	発行所 富山市総曲輪2丁目8-29 真宗大谷派富山教務所	電話 076-421-9770
編集 富山教区如大地編集委員会	教区・別院ホームページ <a href="http://toyama.higashibetsuin.com/">http://toyama.higashibetsuin.com/</a>	教務所アドレス <a href="mailto:toyama@higashihonganji.or.jp">toyama@higashihonganji.or.jp</a>

富山教区・富山別院

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要 厳修（法要期間：2014年5月23日～25日）



教区・別院 御遠忌法要 結願日中（25日）

❖❖❖ 宗祖親鸞聖人  
七百五十回御遠忌法要を終えて ❖❖❖

去る五月二十三日から二十五日までの三日間、富山教区・富山別院の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が厳修された。二十四日に開催された「門首御夫妻歎迎会」では、教区合唱団「コール菩提樹」からお誘いを受けて、一緒に仏教讃歌を合唱した。その中の一曲である「生きる」では二番まで独唱を行った。

私は組の準備もあり、本番まであまり時間はなかつたが、ベストコンディションで臨もうと日課の早朝ウォーキング中に发声練習をすることにした。まだ田植えが終わったばかりの静かな田圃道は、とてもよい練習場となつた。おかげで发声練習にも力が入つた。しかし自分が歳というものだろうか、歌詞がなかなか覚えられない。もしもの時のためにメモをしのばせておいたのだが、後で「カンペ」だと指摘されてしまった。内心忸怩たる思いを抱きながら……。

御遠忌法要も無事終わつた。式支配所をはじめとする百名以上のスタッフの働きも忘れてはいけないだろう。私の真宗の歴史の中でも、五十年に一度という大きな区切りである。輪番さんは締めくくりの挨拶で、「私たちには、八百回忌に向けて次の世代にバトンタッチしていく使命がある」と力強くお話しされた。この先の見えない時代にいかなる境遇にあろうと、暗い世の中に火を灯す子供達になってほしいという意味の民話が、長崎に「しらぬい」という名で残つている。

こんひと粒は金になれ  
こんひと粒は銀になれ  
こんひと粒は明かりとなつて  
夜の海に火を灯せ 夜の海に火を灯せ  
私は教区の御遠忌という節目に立ち会つた。御遠忌は終わつたが、歩みを止めてはいけない。

御遠忌法要に先立ち、さまざまな讚仰事業が開催されました。

これらの取組みについては、御遠忌テーマ「私は何を願って生きるのか？—親鸞からのメッセージ—」が、どのように私たちに語りかけてくるのかを具現化する取り組みでもありました。

また、多くの方々にご参加いただき、富山別院創建の願いと歴史に立ち返り、市民に開かれた本来の別院に還る一歩となることが改めて確認される事業となりました。

## 御遠忌

### オープニングセレモニー



「コール菩提樹」による合唱

期日	3月3日(月)
講師	三明智彰氏 (九州大谷短期大学副学長)
講題	御遠忌に遇う
会場	富山別院本堂

三月三日に御遠忌「オープニングセレモニー」が開催されました。教区混声合唱団「コール菩提樹」による仏教讃歌の合唱と御遠忌法要当日の講師でもある三明智彰氏による法話が行われ、各組からの団体参拝の方々や一般参詣の方、約三百人が参拝されました。

### 御遠忌讃仰講演会



女性僧侶によるおつとめ

期日	3月8日(土)
講師	川村妙慶氏 (真宗大谷派僧侶・フリーアナウンサー)
会場	富山別院本堂

三月八日に「御遠忌讃仰講演会」が開催され、富山教区の女性僧侶によるおつとめと川村妙慶氏による講演会が開催され、雪混じりの天候にも関わらず、約四百人の参拝で満堂となりました。

### 富山別院「どもまつり

「みんなほとけさまの「どもだ」



「こどもの発表」の様子

期日	5月3日(土)
会場	富山別院本堂および境内

五月三日、富山別院本堂および境内を会場に「富山別院こどもまつり」が開催されました。この日は晴天にも恵まれ、多くの方が参拝され、本堂内ではサオモチャミュージックさん（富山県出身のアーティスト）によるコンサートや晴雲幼稚園・同朋幼稚園の園児による「こどもの発表」が行われました。また、境内では「食のブース」「遊びのブース」が設けられ、賑わいました。

# 教区・別院 御遠忌讚仰事業

期間 3月3日(月)から5月11日(日)まで  
講師 富山教区内の僧侶  
(一部他教区僧侶含む)

会場 富山別院本堂

(一部他教区僧侶含む)

会場 富山別院本堂

(一部他教区僧侶含む)

## 百人百話



41号線沿いに設置された案内看板

この企画は「現代社会との接点をもつ」と「伝道を使命とする僧侶の育成」を目的として、市街地にある富山別院の特性を活かし、これまでご縁のなかった方々に呼びかけ開催したものです。

三月三日から五月十一日まで、御遠忌の讚仰事業として富山教区内の僧侶約九十人（一部他教区僧侶含む）が日替わりで法話をを行う「百人百話」が開催されました。



百人百話の様子

である川村妙慶氏に出演いただいたテレビCMを県内で放映し多くの方に視聴いただき、約七十日間にわるこの「百人百話」に延べ約五千三百人の方々が聴聞され、当初の予定を上回る参加者でした。

また、四月十八日からの毎週金曜日の夜に「百人百話」のサポート企画として「坊主バー」（教区仏教青年会主催・全四回）を別院境内にて開催しました。

当日の「百人百話」講師のお話を聞いての感想や、日ごろ寺院や僧侶に感じておられるご意見など、様々

な話を率直にお聞かせいただきました。また、富山大学アカペラサークルによるミニコンサートも場を盛り上げてくださいました。

このたびの「百人百話」「坊主バー」の企画に賛同いただき、特に「百人百話」におきましては、講師としてご出講いただいた方々および平日・休日を問わず日々聴聞くださった皆様方には、この場をお借りして御礼申し上げます。

富山大学アカペラサークルによるミニコンサート



「坊主バー」の様子

本誌4頁から3名の方の「百人百話」講義録を掲載しております。  
ぜひご一読ください。



百人の僧侶による百の心に効くお話

講義錄

# 百人百話

二月三日から五月十一日までの期間中、富山別院本堂において御遠忌の讃仰事業として「百人百話」が開催されました。本誌では、三名の方の「法話」を掲載します。



## 凡愚の身帰し難い

第十二組 勝福寺  
大中臣 千恵美氏

〔4月21日〕

と思いましたきっかけをあらためて、話させていただこうと思います。

今から三十数年前に、私の夫が大谷派の教師資格を取得する為に、東京の浅草にありました宗派立の東京大谷専題を出しました。たことに、今

更ながら後悔  
といいますか、非常に心もとない思い  
であります。沢山の皆さんのお前でお詫  
をするというのは初めてでして、どう  
までお伝えできるのかわかりませんが  
時間までお付き合い下さい。

今日、この場に立たせていただくと  
いうことで、やはり私が真宗に出遇つ  
たといいますか、真宗に学んでいこう

修学院に、三期生として入学いたしました。其処は夜学で、日中の仕事を終えた方や学生が通う場所でした。当時、夫は会社を辞めてフリーのライターをしておりました。フリーというのは何とも心細い職業でして、安定しない収入の中で長男を身ごもっていた私には、非常に生活の不安がありました。そんな中で夫は学院に通うようになるので

授業が終わりますと仲間たちと飲むわけです。授業の後の酒の席ですから、時間を忘れて飲んでしまうと終電に間に合わなくなる。結局、先生のお宅や友達の家に泊めていただいて、翌日の方にはそのまま学院へ、ということをしていました。今でこそ私もそういう状況は理解できるのですが、当時の私は夫の通う学院も、ましてや真宗の教えにも全く関心がありませんでしたので、そこまで夫を惹き付ける学院というのは何なんだと言って、悶々としておりました。ある時、夫が自分の代わりに学院で授業を受けてくれと言い出しまして、半ば強引に浅草に連れて行かれました。私も怖いもの知らずですから、もぐりで夫の代わりに授業を受けました。そこで初めて、学院長の宗正元先生そじょうげんと名前をお会いしました。授業ですから出席を取ります。「大中臣くん」と名前を呼ばれましたので「はい」と返事をすると、先生と私が合いました。しかし何も咎められませんでした。思えばあの頃からおおらかな学び舎だったよう思います。

るな事情で無くなりましたが、有志の方たちによつて「雲集<sup>うんじゆ</sup>学舎<sup>がくしゃ</sup>」といつ私塾の道場が開かれました。浅草の西下さっています。浅草から隅田川を渡つた向島という場所には、宗先生のご自宅があります。小さなマンションですが、その隣の部屋がやはり「行人舍<sup>ぎやうしゃ</sup>」といつ聞法道場になつております。それぞれに聞法会が開かれてゐるわけですが、その特徴といふのは、単なる僧侶の集まりではなく、いろいろな生業を持つた方が足を運ばれております。他の組織との関わりはありませんので、ある意味、伸び伸びとした学び舎であります。此處には、遠くは東北や九州から、時間もお金も惜しまず尋ねてくる方がいらっしゃいます。そこに共通しているのは、やはり道を求める続けるという姿勢です。自分の都合を顧みず、阿弥陀様<sup>あみださま</sup>の教えといいますか、本願のお法を絶えず聞いていくという姿勢を感じます。

そういう場所で私自身も、宗先生個人ではなく、そういう方々の姿に、いろいろなことを教わつて参りました。浅草といいますと、最近はスカイツリーで有名になりましたから、大変な賑

わいです。そんな雑踏を歩きながら思っていますのは、こういう都会の片隅で人知れず聞法会が開かれている、また相続されていることに何とも感慨深いものを感じております。自分自身の思いにがんじがらめになっている私を絶えず方向転換させてくれる場所が、この聞法の場のような気がします。なかなか自分の意思では、方向転換はできません。どこまでも私の経験でしか物事を判断しませんから。聞法し、そこで人に出遇うことで初めて自分自身のことに気付かされることがあるように思っています。私はこういう人間だなどと思つていていますが、実は自分がことが一番難解なのかも知れません。

三十数年前に初めて聞いた宗先生のお話の中で、今でも大切にしていることばがあります。

#### 自明のことを自明としない

当時の私は、仏教の話というと何か抹香臭い話だと思い込んでおりました。知らないということは往々にして自分勝手な思い込みと先入観でしか理解しないものです。そこで初めて聞いた言葉に、私の思い込みは覆されました。「自明」というのは、分かり切ったこ

と。当たり前のこと当たり前としない。どういうことかと申しますと、私たちが生きていることにあらためて問い合わせ、あるいは生活を憶念するといふことだと教わりました。ただ私たちの日常生活と言えば、いつの間にか始まりいつの間にか終わっていくような生活です。問い合わせなどといふことはなかなか思い至りません。時には、どうにもならないような家族の問題を通して、生きるってなんだろうと思うこともありますけれども。今度の東日本大震災のようなことも、初めて自然の驚異を目の当たりにし、人間のおごりということを思うわけです。そこで、改めて誰しもが持つ普遍的な問い合わせ返すことがあります。しかし、そのこともすぐに忘れてしまう。なかなか問い合わせを持ち続けるということは、容易ではありません。

ある門徒さんは地元の資産家でしたが、事業に失敗し、生活が一変しました。仏壇も無くなり、壁に阿弥陀様の絵像をお掛けして、そこで毎月のお勤めをします。私どもが当たり前に営んでいる生活が成り立っていない状況です。もうひと方は、老々介護のお宅です。九十才になるお爺さんが妻のお世話をしています。離婚をして帰ってきた娘さんは、生活の為に毎日午前四時まで仕事をしているので、家事ができません。ここでも家族の会話は勿論、食卓を囲むことが一切無いということです。本当に深刻です。出口の見えないと出て参ります。家族の話とか日常の様々なことを話すようになります。問題の無い家庭というのではないのですね。勿論、我が家もそうですが、それぞれがいろいろな問題を抱えているわけですね。そのような中で、非常に辛い生活を送られている門徒さんがおられます。富山県は持ち家が充実していると言われますが、立派な家の外觀からは窺えます。都会の問題と思っていたことがあります。どちらのお宅もこういう状況の中で、月参りを休まず続けておられます。そこに信仰ということをつくづく思ひます。

「信心によって生活に拠り所が定まる」と教わっております。我々は、なかなか自身の生きることすら定まっておりません。だいたい現代の私どもの生活は理性に立って思い描いておりまますから、何か問題が起これば何とかしなくては、と思ってしまいます。現実というものをそのまま受け入れられない。解決することに右往左往しているのが私たちです。そういう我々が拠り所にしているのは、理知・分別に立つた自分の世界です。理知・分別に立つた自分的世界です。理知・分別というのは、自分が見たり、聞いたり、考えたりすることです。経験を重ねることで、自分なりの価値観を疑うことすら

と出て参ります。家族の話とか日常の様々なことを話すようになります。問題の無い家庭というのではないのですね。勿論、我が家もそうですが、それぞれがいろいろな問題を抱えているわけですね。しかし、其処では不思議な明るさを感じるのです。愚痴るのではなく、がいろいろな問題を抱えているわけですね。そのような中で、非常に辛い生活を送られている門徒さんがおられます。富山県は持ち家が充実していると言われますが、立派な家の外觀からは窺えます。都会の問題と思っていたことがあります。どちらのお宅もこういう状況の中で、月参りを休まず続けておられます。そこには、明らかに地方でも起きていることがあります。どちらのお宅もこういう状況の中で、月参りを休まず続けておられます。そこには、明らかに地方でも起きていることがあります。

と出て参ります。家族の話とか日常の様々なことを話すようになります。問題の無い家庭というのではないのですね。勿論、我が家もそうですが、それぞれがいろいろな問題を抱えているわけですね。そのような中で、非常に辛い生活を送られている門徒さんがおられます。富山県は持ち家が充実していると言われます。しかし、其処では不思議な明るさを感じるのです。愚痴るのではなく、がいろいろな問題を抱えているわけですね。自分が見たり、聞いたり、考えたりすることです。経験を重ねることで、自分なりの価値観を疑うことすら

しません。自分の世界がもう生きる拠り所となつております。そうしますと、道を尋ねるということはなかなか思わないわけです。私の理知・分別は、どこまでも自分の見出だしたものを見こすとします。こうあるべきだという世界です。そして世間では、経験を積んで自信を持つて生きることを是とします。そうなると疑問や不安を持たなくなります……なかなか厄介です。

我々は、絶えず様々な出来事を抱えて生きています。問題が解決したところで、また新たに出来事が起こるという繰り返しです。そういうことすら気が付かず生きているのが私どもではないでしょうか。「自明のことを自明としない」ということばで考えさせられることがあります。

「分からぬから聞くのです」と宗

先生から言われました。あまりに当たり前のことに、私には自覚があります。でも、言い方を変えれば、何事も分かったこととしての生活をしています。ですから、立ち返るということがなかなかできません。そういう姿を「凡愚」と。ようやく凡愚が出て参りました。

**親鸞聖人は、ご自身のことを「愚禿**

**（しやく、親鸞）**と名告られております。これはご自身を愚かな身と反省しているのではありません。反省というのはなかなか懲りません。私はお酒が好きなものですから、飲みすぎた翌日は二日酔いと自己嫌悪に苦しみます。その日は二度と酒は飲まないと反省するのですがけれども、ちつとも懲りません。

凡愚というのは、我々の現実の身といふことです。いつかどこかで誰かと一緒に生きている現実の身です。現実の身は一人ひとり違いがあります。境遇も違えば能力も違います。これを仏教では、「身」と「土」として表されていますが、そういう自分の姿に私たちはなかなか気付けません。自分でないものを自分として生きていますから。自分の考え方や思いでは、容易に気付けないのです。

真宗の教えには声がある、と教わりました。声というのは呼びかけです。我々を絶えず喚び返してくれる声。道を求めて歩んでこられた先達の呼びかけです。しかし、その呼びかけというものがなかなかできません。そういう姿を「凡愚」と。ようやく凡愚が出て参りました。

私どもの寺では、「凡愚の会」という聞法会を年五回開いております。東京の雲集学舎代表の大島義男先生を講師としてお迎えし、今年で一〇年目になります。その会の女性陣から、「女性だけの会を作らないか」という要望があり、昨年六月には「豊柔の会」という女たちの会が出来上りました。大島先生が、「女性の持つ柔軟さを大切に」という願いからつけて下さいました。月に一度、皆で正信偈のお勤めをして、日頃気づいたことなどの座談をします。そこでもやはり真宗の教えは難しいとか、正信偈の意味が分からぬという意見が出ます。合理的な時代の中で、分からぬことにはすぐ説明を求めてしまう私たちがいます。私も安直にことばの意味を知ろうとするのですが、先輩たちからは「先ず読誦

せよ」と教えられます。言葉を覚えていく幼児が、お母さんから自分ひとりの為に呼びかけられる。その言葉の意味は分からなくても、繰り返し幼児は聞き取るうとします。同じように、正信偈のことばを私一人の為に呼びかけられている、と受け取れるのかどうか。そのことが大事なことだと、大島先生されました。

分かる分からぬことではなく、ひたすら呼びかけの声に聞き続けていく。真宗門徒の大変な生活だと思います。取り留めのない話で大変失礼いたしました。



## 親鸞からのメッセージ … 第十組 應聲寺 和田 悠史氏

【5月2日】



私は今二十六歳で、多分百人百話の講師の中で最年少だと思います。

大学に入学した十八歳から二十歳のころの私というのは、お坊さんの資格を取るための大学に通ってはいましたが、まだどこかで自分がお寺に入ることに抵抗を感じており、そんな思いを持ったまま通学していた為、当然勉強も持らず、授業をさぼることもあったりと、将来の事を漠然と考えたままふわふわと大学生生活を過ごしていました。しかし二十歳になつたころ、あるきっかけで今の奥さんと出会い、その中でお互い進路のことだつたりいろいろと悩みを打ち明けたり、私もあれこれ相談に乗つてもらつたりと、お互いの悩みなどをよく話しあうようになります。そうこうしているうちに、私はある

ことに気付きました。今まで自分の事ばかり考えて頭をこねくっていたのが、自分の事を理解しようとしてくれている相手がいると、そういうことに気付いた時に、これじゃあ駄目だと、初めて自分の現状を知ることができたのです。それは、口先だけで何も努力していない自分という姿だったんです。自分の事ばかり考えていたのが、反対に相手の事を理解することで、本当に相手の事を理解することができたのですが、これも何かのご縁だと受け止めて、とりあえず頑張つてみようと決心しました。そうやって無事とはいきませんでしたが、卒業することができて、色々ありながらも今こうして結婚させて頂き、お坊さんにならせて頂いたというご縁に巡り合うことができたのです。

ご縁、縁起というものについてですが、先述したように、私がこの原稿を書かせていただけるのも、そもそもこ

れまでに多くのご縁との巡り会わせの結果でありまして、私一人の計らいだけではこの機会も巡つてこなかつただろうと思います。物事の起りこりとい

ものは、必ず何かしらの原因があつて、条件があつて結果を伴うものであります、また条件にもなります。これらは常に身の回りで揺れ動いて、「因」という原因と「縁」という条件、この繰り返しの中であらゆるものは存在しているという事象のことを仏教では略して「縁起」と呼ぶのですが、例えば実生活においてこの縁起を身近に感じる場面といえば、所謂法事の場がそれにあたると思います。我々は身内が亡くなると葬儀を執り行い、一周忌、三回忌とご法事をされるのが一般かと思いま

す。

どれだけ優れた大きい会社の社長さんであつても、成功させたいという本人の意思はあっても、そこに信頼できる部下がいなければ一人で会社をやつてくのは無理な話です。自分は自分勝手に生きているつもりでも、本当は人と人とのつながりの中で生かされている、縁起の中で生かされているということに気付きましょう、というのが浄土、また親鸞聖人からの願いであると私は思います。その浄土というものを通して初めて自分というものは何なのかということが分かってくるのです。

私は思います。その浄土というものを通して初めて自分というものは何のか、苦ということ、苦しみとは何かということについて、最年少の私ですらそうですが、我々はどんな些細なことでも、何かしらの悩みをもつて生きているものです。仏教ではこれらは全て自分の煩惱が悩み苦しみの元になつているとされています。この煩惱とは、自分だという思いのことあります。反対に言えば、自分というものがある限り

においては、死ぬまで煩惱、またその煩惱から生ずる苦しみというものは無くならないということになると思います。我々の日常生活の中でいえば、自分の思い通りにならないということ、これは多々あるかと思います。自分の言っていることが全然相手に理解されなかつたり、あるいは誰かのせいで仕事が上手く進まなかつたり、これらというのも、自分というものと自分以外を比べるから苦しみが生まれ悩まされるのであり、また反対に、自分の言つてることが相手に分かってもらえたり、仕事が上手く進むと、今度は自分の思ひ通りになつたと思うのです。

要はその人が自分にとって都合がいい悪いかということであり、これが苦しみを生む原因になつてゐるのです。しかもこの自分にとって都合がいい悪いか、つまり「俺が俺が」という心は、例えばお金が無いと政治が悪い、学校で落ちこぼれると先生が悪いなどなど、なにかにつけて人のせいにしてしまうことになつていき、それが癖になつてしまふと「おかげさま」ということに気付けなくなつてしまふことになりかねません。そうすると先ほども

言つた、ご縁に生かされているということが見えなくなつてしまふんじゃないでしようか。

私は結婚して三年になりますが。結婚したての頃はそれこそバラ色の新婚生活が待つてゐると思いましたが、いざ一緒になつてみるとなかなかこれがうまくいかず、付き合いは長いとはいえ生まれ育つた環境が違う者が、一緒に暮らすわけですから、お互のすれば違ひから喧嘩とまではいかなくとも陥悪になつたりしたことでも多々あります。しかし、一緒に生活していくうちに徐々に互いの悪い面も認めあうようになつてき、その中で自分で思ひもしなかつたような悪い癖も知ることができました。そしてこの癖というのは怖いもんだな、とも思うようになり

病氣になること、死ぬことが苦しみであります。四苦は「生」・「老」・「病」・「死」、生まれること、老いること、病氣になること、死ぬことが苦しみであるというのと他に、「愛別離苦」・「怨憎会苦」・「求不得苦」・「五蘊盛苦」、この四つを合わせて八苦といいます。最近ではこの中でも特に「求不得苦」、求めても得られない苦しみというのが顕著になつてゐるんじゃないかな、と

の見方というのは知らず知らずのうちに癖となり言葉として、あるいは態度として現れるということです。先にも述べたように、何かあるごとに周りのせいにはばかりしているとある時ついにその癖が態度として人に出してしまつて、生き残るためには長いとはいひ喧嘩のもとになりかねるので、やはり縁というものを念頭におくのです。おかげさまで生かされているといふことをどこかで意識していれば、やみくもにあれが悪いこれが悪いということを言わなくてすむようになるんじゃないでしょうか。

### 仏教には「四苦八苦」という言葉が

あります。

四苦は「生」・「老」・「病」

・「死」、

生まれること、老いること、

病氣になること、死ぬことが苦しみで

あります。

四苦は「生」・「老」・「病」

・「死」、

生まれること、老いること、

で原稿を読んだのはタブレット端末です。そこで、手書きをする必要もありません。便利になつたと思う反面、言つてることとやつてることが矛盾していますが、一度でも便利さを知つてしまふと、中々手放すことができなくなつてしまふのも人間だと思います。

これこそが人間の有り様として、これは生きている限りにおいては大小さまざまありますが、執着し、これでは駄目だと思っていても手放せない、思ひ通りにいかないという苦しみの中で日々を送っているのが我々なのではないでしょうか。また、我々は自分のことは棚に上げて、すぐに相手を見下してしまふものもあります。人間とはそういう生き物だということをまず自覚しなさいよ、と言っているのが淨土であり、阿弥陀仏の働きなのではないでしょうか。そこをまず通すことから人間の本当の姿、自分というものが見えてくるのではないでしようか。

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。

〔『歎異抄』真宗聖典 627頁〕

## 道標みちしるべ



佛教といふのは、仏様の教えです。仏様の教えです。仏が、仏になる教えでもあります。

基督教やイスラム教とは全然違います。私たちも全員仏になります。私たちには能力の高い低いはあります。男女の違い、貧富の差もあります。けれども、すべからく全ての生きとし生けるものは、全て仏になります。そういう種を持っております。あとは種を開かせるか、眠らせるか、そのま腐らせるかということですね。仏になる教えを仏さまが説いてくださる。それには膨大な量の教えがありますが、親鸞聖人という方は法然上人に出遇われて、その膨大な量の教えをこういつてしまわされた。「仏教とはなんですか。仏になる教えです。どうすればいいですか。念佛しなさい。念佛して仏になります。これが仏道です」。真宗というのは仏教の一派というふうに思われてお

第十三組 蓮通寺 河村 浩氏

【5月11日】

りますけれども、仏教というものを親鸞聖人が見た時に、仏教を受け取った姿が真宗という教えです。「念佛をするというのは真宗の眼目ですが、それ以外に私たちには残念ながら仏になる手だてがない」といい切っておられます。

お釈迦様が生まれたのは二千五百年前で、親鸞聖人の頃からなら千七百年前です。インドでお釈迦様が生まれた理由は、仏様、つまり阿弥陀如来の教えを説きたい、その為だけにお釈迦様は命を受けられたと言われます。これを「出世の本懐」といいます。お釈迦様が生まれた本懐、つまり理由は、ただ阿弥陀如来の教えを説く為であり、念佛だということです。では念佛は何かと申しますと、本願に書いてあるのです。

本願は四十八種類あり、四十八願といいます。四十八あるのですが、四十五プラス三なのです。四十五種類は淨土の様子です。「お淨土というのはこそ

ういう世界だよ」と書いてあります。

三種類はお淨土への行き方が書いてあります。十八・十九・二十願は、淨土へ行くにはどうしたらいいかということが書いてあります。十八願のことを、

本願の中の本願で「王本願」といいます。一番大事なのです。「念佛しなさい。私が世界を作たけれども、そのことを信用して、わたしの名前を呼びなさい」といっておられます。それが十八願なのです。「そうすれば必ず淨土へ行くことが出来ますよ」ということです。

阿弥陀如来という方が長い間修行して、自分の本願を建てて一つの世界をつくれたのです。この娑婆世界に生きている人を呼び寄せて、そう試験があります。どういう試験があるかというと、「願いなさい」ということです。「願うかどうか」という試験があるのです。私のことを信用して「お淨土へ行きたいなあ」と思った人は、必ず行けるように念佛を一回すればいい、という試験です。念佛を一回というのは「南無阿弥陀仏」ですが、場合によっては「なんまんだぶつ」や「なんまん、なんまん」と言つたりします。子供には特に「なんまん、なんまん」しなさい、と言います。これを途中で挫折する人はいないのです。

えない、という人はいません。一回で言えてしまうのです。さつき正信偈をお勤めしました。皆さん「なんまんだぶ」と言つたでしょう。言つたとすることは、試験クリアです。もうすでに試験クリアしたので、私たちが淨土へ行くことには障りはなくなっています。それほどまでに簡単な試験にしないと、不合格者が出てしまうということがあります。

阿弥陀如来という方が長い間修行して、自分の本願を建てて一つの世界をつくれたのです。この娑婆世界に生きている人を呼び寄せて、そう試験があります。どういう試験があるかというと、「願いなさい」ということです。この娑婆では、人々は救われないので、淨土という世界を建てて、その世界に呼び込もうとするのです。そして念佛さえすれば必ず合格するのです。そういう願を建てられたのです。この願なら間違いない、そしてそのため阿弥陀如来は、五劫の間考えておられたのです。五劫とは、長い長い時間です。この試験なら絶対に不合格者はでないので、念佛さえすればいいのです。念佛するかどうか、それを決めるのは私たちです。弱きものが「いいことやなあ」と思うような世界をつく

いう世界はそういう世界なのですが、この全部を支えるものがあります。共に、お互いが明るく和やかに楽しめる世界です。そういう世界をつくれば、みんな来たがるに違いない、「来たい、来たいなあ」と思つたら、必ず合格する試験が与えられるのです。必ず合格する試験ですから合格して、そういう世界に必ず行くことができるのです。阿弥陀如来は、そういう仕組みにしたいという願いを建てられました。

これは浄土の話ですが、実は私たちの今生きている婆婆と浄土が何も変わらないものであれば、別段行く必要はないのです。ここも共に明るくて和やかで楽しく過ごしていけるところであるならば、ことさら浄土へ行く必要はないのです。この婆婆はそういう所ではないのです。しかも、そういうところではないところに生きていて、私たち一人一人の心はそういう世界を願っているということは、はつきりしているから阿弥陀如来はこういう世界をつくられたのです。私たちは日々の生活に忙しいですから、ごちゃごちゃいつておられないのです。例えば、皆さん

若い衆に「あんた、死んだらどうなると思う」と聞いてごらんなさい。十人が十人「知らん」で終わりです。「そして」いう奴はないのです。「知らん」と言われます。「考へてもわからん」、「どうでもいい」。でもそれは、我々だって大差ないのです。そんな真剣に死んだ後どうなるかなんて考へていません。だから、いつの間にか私たちの頭の中に極楽のイメージが出来上がりてしまっているのです。極楽のイメージは、広いところに池があつて、大きな蓮の花があつて、そこに大きな蓮の葉っぱが浮いて、そこに座つているのです。何か綺麗な音楽が流れている、良い香りが漂っていて、えもいわれぬ美しい風景で、そこで歳を取る、というイメージです。我々にとつては何もすることがない、そういうことはないでしようか。

う一つと思つて生活しておられました。非常に熱心な真宗門徒だったそうです。その婆ちゃんはやがて亡くなりました。そうしたら、テコテコと歩いて行くと、お淨土に着きました。とても良い所で、そこで爺ちゃんも見つけました。そして、爺ちゃんと一緒に蓮の葉っぱの上に乗つて、「はあ～楽しい」と言いながら過ごしていました。でも、三日で飽きるのです。「もうちよっといい所ないか」ということが始まるのです。どんな綺麗な風景でも、三日経てば見飽きるのです。どんな良い音楽も、三日聞いたら飽きるのです。皆さんもうででしょう。良い所へ旅行に行つても、やっぱり家が良いのです。何が良いか分からぬのです。どこか良い所へ行つても駄目なのです。私たちがこのままの根性でお淨土へ行くと、三日で飽きます。どんなに良いと言われても、どんなに楽しいと言われても、どんなに和やかと言われても、三日で飽きます。もうちょっと我慢強くなつても、三日で慣れて、そして一週間で飽きます。そういう世界ではないのです。

で願っているのだ、ということを私に知らせる為の世界なのです。だから淨土があるかどうかは誰も知らないでしょう。坊主も誰も知らないのです。一人として「淨土へ行つて帰つて来ました」という人はいないのです。「この前ちょっと行つて来たよ」という人はいないのです。皆さん周りに先に亡くなつた人がいるでしょう。この婆婆には携帶電話がありますが、誰一人として電話してこないのです。手紙も来ないので。死んだらお花畠で会つて、だいぶ前に亡くなつたお婆ちゃんが「行け、行け」と言つたから帰つてきた、というでしよう。臨死体験と言いますが、これも本当かどうか分からぬのです。残念ながら淨土があるかないか分からぬのです。誰も分からぬ、知つているのは亡くなつた人だけです。だから死ねば坊主が嘘つきかどうか分かるのです。それまでは、とりあえず信じて下さい。本当に決める必要はないけれども、嘘つきだと決める必要もないのです。「そういうことを考へて生きております。良いこ

とや悪いこと、色々考えております。その根底にある私の本当の願いは、私の縁のある人たちと一緒に明るく和やかに楽しく過ごしていきたい、という願いです。それ以外にはない訳です。それを邪魔しているものは煩悩です。残念ながら煩悩というのは、私たち全員に備わっているのです。だから、まだ煩悩が発達していない生まれたての子供を見ると、私たちの方が淀むことになっております。私も生まれた時はそうだったのです。私だと五十七年前、可愛い、可愛い子でした。五十七年でこうなりました。だけど今、右肩下がりです。私が街を歩いていると、みんな避けて行きますよ。歳をくえればくうほど、人相が悪くなるのです。それは煩悩を共にいただいているからです。だけど煩悩の内側にそっと隠れている私の本当の願いは「あいつをおとしめてやろう」とか「こなしてやろう」とかではないのです。「共に明るく和やかに楽しく生きていきたい」という願いを私は持っているのだということを知らせるために、阿弥陀如来は御苦勞して下さっているのです。

仏教では、時代分けをしています。お釈迦様がおられたとき、お釈迦様が

亡くなつて間もないとき、そしてお釈迦様が亡くなつてだいぶ経っているときの三つに時代分けをしています。それぞれ「正法」・「像法」・「末法」と言います。お釈迦様が生きているときは、お釈迦様という生きた仏様がいらっしゃいますから、その場その場で助けをもらえるということです。お釈迦様が亡くなつてしまふくは、直接教えを聞いた人がまだ残っておりますから、その人たちに聞けば間接的ながらも助けてもらえます。そういう人がみんないなくなつた時代を末法と言います。残念ながら今は末法です。親鸞聖人も泣いていらっしゃいます。お釈迦様が亡くなつて、ずいぶん時間が経ってしまっています。正法・像法の時期が終りです。私が街を歩いていると、みんな避けて行きますよ。歳をくえればくうほど、人相が悪くなるのです。それは睡眠欲と食欲、それをはずすと人間は死にます。「生きたまま悟りを開くのは、はつきりいって無理です」ということに気付いたのが、法然上人もそうですけれども、淨土宗といわれる教えを開かれた方々です。煩悩を持ったまま救われて行くことはどういふことなのでしょうか。煩悩をはずす

そういうことを親鸞聖人は言わされたのです。なぜならば、煩悩の中に「睡眠欲」と「食欲」が入っているのです。「眠らない」、「食べない」ということは死ぬということです。悪い心を起こさない、ということです。ぐらりなら何とかなるのです。でも「眠らない」「食べない」そんな話は無いです。

親鸞聖人が比叡山でされた行は、千日回峰行という行です。一番酷いのは、三十日間眠らずに歩き続けます。丸い柱に紐を結んで、紐を持って念佛を称えながら歩き続けるわけです。三日間続けますが、問題は眠気です。十日間続けますが、問題は眠気です。死にます。睡眠欲と食欲、それをはずすと人間は死にます。「生きたまま悟りを開くのは、はつきりいって無理です」ということがあります。申し訳ないなと思つても、またやつてしまふのです。性懲りもなく、根性の悪さは治らないのです。申し訳ない気持ちで「本当はそうでないようなやり方が出来たらな」と思つては、自分の本当の願いに気付くことによつて、私たちは嫌いな人とも共に生きていくのです。

そういう時期に、相変わらずあるのは煩悩です。「その煩悩を何とかして無くしましよう」ということがあります。「厳しい修行をして自分の中から煩悩を追い出したい。清らかな身と心になつて悟りを開きましょう」という人たちです。そういうことは不可能だ

「煩悩を持ったまま必ず救われる道がある」と親鸞聖人は言われるのです。今の自分の姿に気付くこと、そして自分の自分が持つている本当の願いに気付くこと、私たちはこの二つを持つて必ず救われて行く道を開いているのだと云ふことです。

私は無くせない煩悩があります。だからいつも人を傷つけているのです。やめようと思っているのにやめられないのです。言わないでおこうと思っていても、つい言ってしまうのです。そのことがとても申し訳ないと思つては、毎日毎日繰り返しているのです。そのことを毎日毎日繰り返していくのをやつてしまふのです。性懲りもなく、根性の悪さは治らないのです。申し訳ない気持ちで「本当はそうでないようなやり方が出来たらな」と思つては、自分の本当の願いに気付くことによつて、私たちは嫌いな人とも共に生きていくのです。

私たちの本性は、仏様の見解です。「あなたには仏になる種がある。あなたの性根は、すべての人々と仲良く生きたいと思っている。あなたはそういう人間だ。そういう命を授かっている」と阿弥陀如来は言つておられるのです。

「そのことに気付いて生きて行きなさい。そのことを自分の身に付けるのは、中々うまくいかないのだ」。だから「道標」と書きました。いつもそこに書いてあるのです。「あなたの本性はここにありますよ。意地悪とか根性悪とかは、あなたの本性ではありませんよ」。そういう「道標」をいただいて私は、それでもやっぱり苦労の方が圧倒的に多い婆婆を生きていかなければならぬのです。生きていれば嫌な事ばかりですし、悲しいことだらけです。

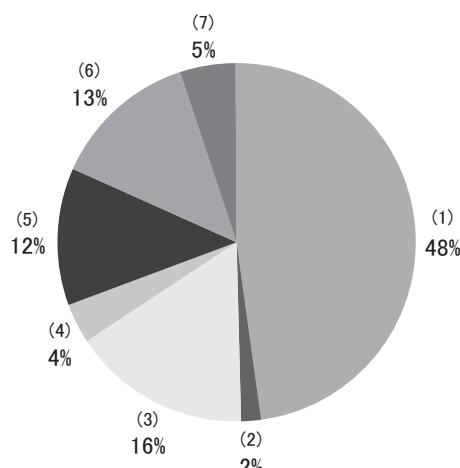
三年前に東日本大震災があった時に、「あー」と思っても何一つ出来ませんでした。命を助ける事が出来ないのです。大事な人が亡くなれば泣けます。だけど占い師が三十人亡くなつても泣けないのです。そんなものです。そういう煩惱を私たちはいただいています。「そういう人たちの命も、本当に輝いてくれればいいのに」と思っているのです。そういう根性を私たちは持つています。そのことは、お釈迦様も阿弥陀様も間違いないと仰っているのです。私たちは煩惱具足で、ろくでもない生活をしておりますけれども、それは本性ではないのです。私たち人間の本性

は、実は尊ばれるに相応しいものなのです。「そのことに気付いて少しでもお互いに尊びあうということが始まるといいですね。それが実は南無阿弥陀仏ということの意味ですよ。私の命は淨土に還る命です」と言つておられます。「南無阿弥陀仏」を訳せばそういうことです。私の命は淨土に還る命です。淨土に相応しい命を私は持つておられます。ということは、私の隣で同じように念佛しているその人の命も淨土に還るに相応しい、そういう意味であります。お互いに尊ばれ、喜ばれる命を持つてゐるということを阿弥陀如来は私たちに知らせたいが故に立つておられるのです。急げて寝ていたりする訳ではありませんが、お釈迦様は寝ていたりします。阿弥陀如来はずつと立ておられるのです。私たちがあまりにも遅いので、迎えに来ようと思って、足を一步踏み出した姿なのです。ですから、私たちが阿弥陀如来に迎えられると相応しいものとして、今を生きていよい必要があるのです。そういうことが私たちに課せられた仕事だと思つています。

## 百人百話 参詣者数およびアンケートの集計について

#### 【アンケート設問：今日のお話はいかがでしたか？】

#### ◆ 平日、土・日・祝日別



- (1) わかりやすかった。
  - (2) 専門用語が多く難しかった
  - (3) 心に響いた
  - (4) 何を伝えたいのかわからなかった
  - (5) 仏教思想を知ることができた
  - (6) その他
  - (7) 無回答

週	座数	一座当り 平均
3月4日～5月11日 平 日 延べ人員 2,402名	45座	54名
3月4日～5月11日 土・日・祝日 延べ人員 2,942名	42座	71名

※3月3日 オープニングセレモニー 300名  
3月8日 讃仰講演会 400名 を除く

◆ 集計（全体）

週	座数	一座当たり 平均
3月4日～5月11日 延べ人員 5,344名	87座	62名

※3月3日 オープニングセレモニー 300名  
3月8日 講演会 400名 を除く

「百人百話」開催にあたり、種々ご尽力いただいた三名の方に「百人百話」を終えての感想、御遠忌後の展望についてご意見をいただきましたので掲載いたします。どうぞご覧下さい。

## 「百人百話」を終えて

御遠忌法要委員会  
教化推進部会長

北條 秀樹

教区内の多くの講師、若手スタッフ、事務局の方々のお陰をもって、讃仰事業の「百人百話」・「坊主バー」・「富山別院こどもまつり」を終了させていただきました。当初の不安を払拭するかの如くの沢山の聴聞者に、語り手の緊張感は連日増すばかりでした。願いや思いを伝えられた感じられた人、雰囲気に飲み込まれ時間ばかりが気になり十分に力量を發揮出来なかつた人、それぞれの方が貴重な体験をされたように思います。

ただ全体的に感じられたことは、語り手が思っているほど聴聞者の心には響いていないという現実です。この事は講師一人ひとりに寄せられた聞き手の意見（アンケート）が如

実に語っています。私たちはこの得がたいご意見を無にすることなく、これから教化伝道活動の糧となるよう精進していかなければなりません。今後教区内の教化事業に、少しでも多くの方が参画していかれんことを願つて止みません。合掌

によって、私なりに受止められたことはありがたいことでした。

しかし片や、門徒が寺を護持するという麗しい伝統が、時代の変化のなかで消え去りつあることや、寺自らが生活の維持を真剣に考えざるを得ない厳しい現実もはつきりしてきました。寺と門徒の組織をあげて、足もとを見すえた御遠忌後を模索しなければなりません。

これら課題は、容易に克服できるものではありません。御遠忌はゴールではなくスタートである、と指摘されるとおり、これから歩みこそが大切なでしょう。しかし、立ち上がりなければ第一歩を踏み出すことさえできません。

## 「百人百話」から学ぶもの

御遠忌法要委員会  
副委員長

松本 弘行

企画された当初、開催が危ぶまれた御遠忌讃仰事業「百人百話」が終了しました。

「これで終わるのか」という感慨を持たれた門徒は、私一人ではないはずです。単なる同情意識を越えて、御遠忌後の課題が浮き彫りになつたことでも、高く評価されるものです。実行に関わられた関係者と三十分と

## 立ち上がりの取り組み

駐在教導

渋谷 行成

百人百話は「伝道の寺であつてほしい」という御門徒の声からはじめました。その願いを改めて確認し

いう限られた時間内で説法された僧侶の方々のご努力に敬意を表します。

私個人としましても、御遠忌と百人の僧侶に往々会えたご縁の深さを

たいと思います。

### ①【僧侶の自己研鑽】

僧侶の使命は、本願念佛の教えを自ら聞き、「このこと一つが大事なんだ」と情熱をもって伝えていくことにある。法話を担当するにあたって現状を見つめ、研鑽を積むこと。

### ②【現代社会との接点を回復】

これまで御縁のなかった方々とつながりをもつこと。別院・寺院が、現代社会に生きる人々の苦しみや悲しみに応えうる場であることを回復する。

## 同朋会運動寄稿

# 同朋会運動——その底にあつたもの②

第十二組 明源寺住職 辻 俊明氏

今号では、前号に引き続き同朋会運動寄稿「同朋会運動——その底にあつたもの」の後編をお届けします。前編と合わせてご一読ください。

### 曾我量深師の差別発言から

資料集』による)。

ただ曾我師の社会改良は永遠に起きて来ないという「社会改良論」には了解しかねるわけです。その点からすれば、「社会問題に対する感覚の欠落」という批判が、清沢満之批判の中に有つたことと繋がるようと思えます。そうしてこういう感覚が曾我師、訓霸信雄師（一九〇六・明治三九～一九九八・平成十・九二歳寂）の差別発言にも繋がっていたのではないか、と思うわけです。

いくら真宗二百二十万の人がいらっしゃる大きい声を出して南無阿弥陀仏を称えたからといって、それは特殊部落みたいなもの、何も自慢にならぬ。そう思います。

曾我量深師は、この差別発言に対し、昭和四十五年十一月四日付けにて、次のような責任の「表白」を出しておられます。

以上のような曾我師の表白を読ん

曾我師の差別発言は、昭和四五年九月四日の新潟三条別院における講話「宿縁と宿善」（『中道』十月号）の中で語られた言葉です（以下、差別発言に関しては、『部落問題学習

曾我量深の表白「異なるを嘆く」  
（全文）  
先般私は「宿縁と宿善」という題目でお話をしました時（『中道』十月号 所載）、われわれ宗門人が反省しなければならないこ

ととして、『閉鎖社会』という言葉で言うべきところを差別言辞を用いました。この言葉は使つてならないということを重々知つておりながら、この言葉によつて著しく傷つけられるお方々が現実にあるということに思い至らなかつたことは私の認識が至らなかつたことでありまして省みてまことに恥しい次第であります。私がそんな差別的言辞を使つたということは自分が機の深信を欠いていることを暴露したお恥しいことであります。そういうことは或る程度までは自分にわかつてゐるのだが、口先だけの説法になっていて自分の生活になつていなことを暴露したのでありますまことにお恥しいことである。

これは私一人が全社会に負うべき責任であります。  
心から恐懼慚愧いたします。

と述べられている。協議会員の皆さんにも驚きであったのでないでしょうか。そして「見解」では教学上の問題として、

「機の深信を欠いていることを曝露し」「口先だけの説法になつていて自分の生活になつていてないことを曝露した」とおっしゃつていい「先生、そこまでおっしゃつていいんですか」と思わず心配したくらいの驚きがありました。そして改めて師の純粹な姿勢に感動したものであります。

後日、「真宗学同和問題研究協議会（代表松原祐善）」の「見解」が出版されたが、その中でも、

機の深信が知的領解にとどまって、真に自分の生活になり切つていいないということ、従つて自信教人信に徹し切れないでいるという自己批判がなされている点である。我々は、これが真宗の教えを最も生活化しておられる人と信ずる曾我師の言葉であることに留意せずにはおれない。

第一 現代の真宗学が、なぜ差別意識を克服し得なかつたのか

第二 内外の批判を受けつつ、なお教団から差別問題がなくならないのか

の二点をあげて、教団の体質（差別的）とその教学の関係は絡み合つたまま悪循環的に連続して來たといい、何故克服し得ないかといえば（一部略）、

親鸞と同一の信に生きぬからであると言わねばならない。更に言ふならば、信仰が觀念化し個別化することによつて教団が私有化され「四海皆兄弟」という開かれた広大な世界を見失うこととなつた。

その結果として信仰や教学について語りつつ、自己の宗教生活及び自己の属する教団を厳しく問い合わせすれば、現実社会に対する正しい客観的・科学的認識を持とうとする意欲を失い、社会における教団のあり方や役割に対する鋭い自己認識を欠如することとなつたのである。これらが教団体制の持つ差別的体質を温存し、教団お

よび教学の差別意識を克服できなかつた大きな原因である。

我々は今このことを判然と自覚しなければならない。従つて我々の信純化の徹底を期する課題は、主体的・自覺的に受けとめられねばならないが、同時にその課題は、以上のような問題との取り組みを重要な契機とし内容とするものでなければならぬ。

と述べて、以下には徳川幕藩体制以来の教団の差別温存の歴史を厳しい視点を以つて概観した文が揚げられている。これはお互に考え合つたための格好のテキストであるともいえましよう。

かえりみれば封建体制・徳川幕藩体制下に於ける政治政策としての階級身分差別制度の実施について、その権力に癒着して教団護持を企図した真宗教団は、体制的・思想的・宗教的等、全面的にそれに協調したのであつたが、「外には王法を以て表とし、内心には他人の信心をふかくたくはへて世間の仁義をもつて本とすべし」（『御文』一一六）と言つた蓮如の思

想は、その頃になると完全に世俗権力内仏法となり、親鸞の帝王不拝の精神、自らを権力から絶縁した変革期の精神は痕跡を止めぬまでも変質し、親鸞の神祇不拝の信念、罪福信仰を克服した純粹な信心は、再び民族宗教としての祖先祭祀・鎮護国家の思想と癒着して祈祷仏教へと傾斜していった。

然も親鸞のいう万人に普遍的な人間の尊嚴性・平等性へのめざめは、体制維持のためには、あってはならないものだつたに違ひない。従つて親鸞の教えの核心を示す現生不退の信念、「他の善も要にあらず、惡をもおそるべからず」（『歎異抄』）という信念は、未來往生の思想に転化されて死後の僥幸をたのむ觀念的・幻想的な信仰として説かれることとなつた。

そして親鸞の信を語る言葉、例えば罪惡深重とか惡人正機とか宿業などの重要な言葉も巧みに解釈されて諦め主義的信仰に応用されていったのである。

明治の維新を迎えて後も真宗教団は、國法への従順を内容とする眞俗二諦の思想を掲げて、天皇絶対主義体制と結合し教団体制を護

持し、第二次大戦後もなお今日に至るまで従来の封建的身分制の体质をそのまま継承してきているのである。

一通りの概観ではあるが、団並

びに教学の歴史的現実として差別的体質を温存するものについて、我々は以上のように把握し確認するものである。

そして今こそ、いわゆる専門的

宗教家、換言すれば教団内的人間の宗教意識を離れて、親鸞その人の信と学に帰り、そこに立つて眞に人間を解放する真宗教学樹立のために精進せねばならぬと強く思う。

（代表 松原祐善）

### 訓霸師の差別発言

また訓霸信雄師の差別発言は、一九八七（昭和六十二）年四月一日、全推協全国集会において講題「同朋社会の顯現」の講演の中で語られた。

この頃は同和とか靖国とか、よく問題になつたるそですな。そりや結構な話だが、僕はそういうことやつとるひまがない。（中略）

「自己」とは何ぞや。是れ人生の根本的問題である」——清沢先生の仰せを、どうせもう長く生きられませんから、今しばらくその道を歩きたい、こう思つてゐるわけです。

まず訓霸信雄師のこの発言が何故差別発言かについて、一九八八年五月十三日部落解放同盟中央本部への

〔報告書〕（宗務総長 古賀制二）は、

こういう“差別”とは、差別を見えなくさせる機能をもつ差別であり、課題からの逃避を根拠づけるという差別であります。

と述べ、そして更に（以下要約）、

私たちが一般に「生きている」

という時、その人の信仰的歩みを通して人間そのものの自我・自己

中心性・我執として自覚される罪悪性（ここでは差別性）と、歴史的社會的諸事情によつて生み出さ

れて現に今もある社会的罪悪・差別との両面があります。報告書

（古賀制二）では、それを垂直（信仰的自覚）と水平（社会的罪悪・差別）に例えて、その“交点”に

生きるのが即ち「生きている」と

いう現実であり、「歴史的社會的諸関係の総和として生きる自己」

であると述べている（この点では、

曾我量深師の問題にも基本的に触

れるものであろう）。

そして更に「自己」とは何ぞや」が明らかになつてから、差別の問題と関わろうという「段階論的な表現」は、差別を差別として見えなくさせる差別性をもち、更に逃避を根拠づける差別的仏法として機能し、あるいは機能する可能性を有している、と指摘している。

これは個々の信仰と社會問題として考えられねばならないテーマであると 思います。そして、

訓霸信雄の自己批判書（一九八九年五月十二日、一部）

私は「自己」とは何ぞや」「自覚

が大切である」と繰り返してきましたが、「どのように自己が知られたのか」「自覚の内容は何であったか」を十分に表現することがありませんでした。南無の機として阿弥陀の法に帰命すること、すな

いで、宗教そのものを問う運動として創始されたことは、画期的な歴史的役割を果たしてきたものであります。私はこれから改めて、

阿弥陀仏の大悲に導かれつつ平等な人間関係の形成に一生を捧げる覚悟であります。

等々と述べて最後に、

おります。

同朋会運動の歩みへのかかる視点の欠如が、その無批判的肯定となり、それが訓霸信雄に対する過

大信奉と重なり、結局は自己を肯定していく意識に陥つてこの講述

内容を全面肯定したことが、差別

性を見抜く目を欠落させたのであ

ると思います。

（〔報告書〕 古賀制二）

### 檀家制の下で—村落貴族—

要は私の差別発言は、私の差別心と無自覺的指導者意識に基づくものと深く反省されております。かくて私は、部落解放運動から宗祖親鸞の教えを仰ぎつつ、差別の至純な叫びを謙虚に受けとめて、の現実に学んで参りたいと存じます。

ところで江戸時代初期、幕府がキリスト教対策や人民（庶民）統制として檀家制を布いたことで、今日の宗教から個の自覚の宗教へ」とい

う同朋会運動のテーマは、言葉をかえれば、長い封建的秩序の中をくぐつてきた檀家制と、その中での個々の信仰のありようを問おうとするもの

であります。ただしいろいろな意見はあるとしても、教団内で育ってきた私たち寺族の実感は、檀家さんがあればこそ

の思いであります。それも多ければ多いほど有難いと…。大坊・中坊・少坊・小寺云々と、その在り様はさまざまですが、とにかく檀家制あつたればこそ今のあります。教

団の体質と体制を問い合わせ、新しい教学の樹立が呼ばれる意味と同時に、その困難さも容易に想像されるのでないでしようか。

曾我量深師、訓覇信雄師という教団を代表するお二方が、差別問題で問われた根っこには、個人と社会、信仰と社会問題が課題として浮かび上がってきた。それを私たち一般末寺の所で受け止めれば、ただ恩寵的に自分さえよければ有難いとか、我が寺さえ良ければ……では済まないということを示すものでしよう。

「信に死し願に生きよ」と呼ばれた曾我師の言葉——信心と教学——をもう一度、今は現代という“社会の現場”で確かめねばならないことを示すものであります。

また教団を荷負い同朋会運動の柱として身を張られた訓覇師のご苦労を思いながら、改めて今後の末寺、宗門（教団）のあり方を真剣に考え合う時であります。

もう五十年ほど前、大谷大学で司馬遼太郎氏を呼んだ時、「お寺さんは、昔も今も村落貴族です。しかし今後もそれで良いのか。特に当時の、貧しい下層の人たちと共に生

きた親鸞様を宗祖としていることは、非常に重い課題を荷負っているのではないか」と。私たち末寺学生に語りかけられたことがあります。

封建社会の典型としての徳川幕藩体制に一貫するものは、①社会秩序の重視であり（将軍・封建君主の絶対化）、②身分制秩序の強調、そして③「総じて万般古法に準ずる可し」（徳川成憲百カ条）という古法墨守の姿勢であったといいます。そこでは社会の上下差別や人間の出生・家柄は、先天的規定として固定的に把握され、その境遇や身分差別は各々「分」としてアキラメて生きることが善（善人）として求められるものであつたといいます。丸山真男は、そのことを次のように言っています。

ただ少欲知足にして前業に任せ、身の分済を堪えて花美をなさず。恒に冥覽をして法義にそむかずば、身も納まり家も調て、自ら後世の障となるまでの事はあらじ

〔作業持勧鈔〕

とあり、僧円信『勸化世事證』の説教でも、

民間の輩には孝悌忠臣より外のこと入らざる也。其外の学問は人の邪智を増し、散々の事也。民に邪智盛んなるは治り難きものなり。士君子の輩は文字を知るを要とす。

何をするかというよりも、何であるかとこの方が価値判断の重要な基準となるわけです。

（略）「権利のための闘争」どころか、各人がそれぞれ指定された「分」に安ずることが、こうした社会の秩序維持にとって生命的な要求になっています。

（「あることとすること」）

いろはにはへとが読めいで、人には阿房と笑われても、鈍など言つて誇られても、一つも構ひはない。結局愚かしいのが如来のお好き、足らぬのが御開山聖人のお

それを更に教団的視点で見ると、江戸時代の真宗教団の教化活動は、蓮如上人の御文を主流としたといわれていますが、政治規範（王法為本）と生活倫理（仁義為先）と仏法（内心深信）の三つが混然一体化して説かれることが多く、封建的世俗権力の要求（封建支配の論理）が容易に入り得る質を教化の依りどころそのものが持っていたといわれます。

例えば大谷派初代講師惠空師の言葉にも、

今日の感覚では、余りといえば余りな話と思うが、記録に残されていることは、当時の人気説教師であったのであります。それは荻生徂徠の『太平策』の

氣に入る程に、阿房を悲しみ鈍なるを嘆くな。南無阿弥陀仏を称え事と、御慈悲の程を忘れさせねば外に何も知らぬがよい。知り立すると慢気がさひて根性が悪うなる程に、覚えたがるな知りたがるなどの御意見じゃ。

いう言葉と、ぴったり呼応しているわけです。そしてそういう檀家制度の中の寺の在り方を、熊沢蕃山は、

近年は、切支丹の御法度以来、

信もなき仏法また盛んになりき、天下おしなべて檀那寺を持ちぬれば、坊主等は戒律のたしなみもいらず学問もいらず、ただ切支丹と

違うとのみにて心易く世を貪る。

(『宇佐問答』)

という辛辣な言葉で評しています。

とにかくこの時代は非常に身分が重視されており、その中でも寺院僧分は一般に上位に位置付けられていたのでありました。

### 身近な差別

私が二十才前後の頃、貧しくても

のどかな郷里であったが、月忌参り先の人柄の良いお婆さんが、私を励ます意味もあってか、「俺らづれは百姓生まれだけど、兄さんなどはいいところに生まれておられるんだから、頑張って下さいねー」と、しばしば言われたものである。その都度「いや生まれって、そんなことありませんよ」と否定しながらも、丁寧に扱われると、何か心がホッコリするようなものを感じてし。非常に微妙な心理ですが、しかしそういう身分差別的な、下に見られるのでなく、むしろ上に見られて丁寧にされると、しかもそういうことが長く続くと、或は何世代も続くと、やがて“それが当たり前”という感覚が否応なし

に、心身と生活に浸み込むのではないでしようか。

身近な差別ということは非常に難しい。差別されることには敏感であつても、差別していることには無神経・無感覚であることが多いからです。時には差別に気付いても、習慣や伝統にこと寄せて黙認していることもあります。都合の悪い差別には声高ですが、都合の良い差別（？）には、無神経か黙認している。差別体质の根は深いです。

としごろ念佛して往生をねがうしには、もとあしかりしわがこころをもおもいかえして、ともの同情にもねんごろのこころのおわしましあわばこそ、世をいとうしるしにてもそうらわめとこそ、おぼえそうらえ。よくよく御ころえそそうろうべし。

(親鸞『御消息集』聖典(五)三頁)

このようないい宗祖の言葉に寺族と門徒、或は寺族相互が真剣に耳を傾けてうなづき、そこへ帰れるかどうか。大きな課題であります。

江戸幕藩体制以来、檀家制によつて各寺院がとにかく一応敬われなが

ら今日まで護持されてきましたが、それがただ有難いというだけでなしに、寺として今何が大事なのか、何を本当にしなくてはならないのか。

このことは、世間的礼儀作法以上に、本当に重く考えねばならないことだと思います。曉鳥師の言葉に「一にも信心、二にも信心、三にも信心」とあったが、寺族一人ひとりが他人も信心、事でなく、本当に聞法者になつてくかどうかが、今、最も緊急の一大事であります。

親鸞聖人がもし今おいでになれば、恐らくそういうことに一番敏感であつたかと思います。『悲嘆述懐和讃』や、『仏智疑惑和讃』、御消息の文などの底に流れる深い慚愧懺悔の真情が思われます。今そういう感覺を大切にしながら、聞法第一の一歩一歩の改革の歩みが求められており、そういう意味で、今、寺はお互に厳しいところに立たされていると思ひます。

お助けまちがいないといつてるのは、助かるだろうという信心であつて「だろう信心」は本当の信心ではないのです。

たすかっておるという、現在の事実でなければならぬのです。未来を予想して助かるだろうといふのは、信心でもなんでもないと私は思います。

(『往生と成仏』)

お助けまちがいないといつてるのは、助かるだろうという信心であつて「だろう信心」は本当の信心ではないのです。

たすかっておるという、現在の事実でなければならぬのです。未来を予想して助かるだろうといふのは、信心でもなんでもないと私は思います。

宗祖親鸞は經典（本願文・成就文等）の言葉を読み替えてまで現在の救いを現生正定聚・現生不退等の言葉を以つて明かにして下さいました。

して具体的歩みがなければ、実を結ばないように思います。

### 現在の救い

淨土真宗の教えに出遇うということは、現在に救いを得ることであります。先に紹介した和田稠師の言葉も、それをふまえて今日の運動を語ろうとされたものがありました。

曾我量深師の言葉に、

それは、他方回向による“現在の救い”を云うものであります。それが今日、充分に伝えられないまま、「阿弥陀様の有難いお助け」という未来的恩寵的な感覚で多くは受け取られているのでないでしょうか。それでは真宗の本義がぼやけたままであり、宗祖のご苦労を無にするものでありましょう。またそれでは真に現代の人々の力にならないのでないでしょうか。

真宗ではまた、悪人正機といい、機の深信といい、罪悪深重といいますが、それは私どもにどんな自覚を与えるものか。それについて、安田理深師の次の言葉は、私たちに大きな示唆を与えるのではないかと思います。

罪悪深重とは人間を低く卑しめることではない。妄想を叩き壊して本当の衆生の自覚を得させるのである。本当の機を明らかにして、機に自信をもたせるのである。本願を背負う確信を与える。

淨土に生きる因は、淨土を生み出した因の外にない。淨土を生み出した因を自覺するから、淨土に生まれる因になるのである。是が往生淨土という『大無量壽經』の

建築の根である。その根にふれてはじめて、ここにおりながら淨土における信心が成り立つ。

我々は、信心の根をおさえねばならぬ。根を知らぬ自信は自分でかためた信、建立自信である。

淨土は安心する世界であると共に、立ち上がる世界である。

(安田理深『願生淨土』)

これは、清沢満之師、曾我量深師を受け継いで求道的に歩まれた安田理深師の言葉であり、私たちの眼を覚まさせる言葉でないだろうか。

また自己の信念確立(信心)と社会問題ということに対しても、安田師の次の言葉は大切であると思います。

一つの問題を解決させようとしたら、全世界の問題に関係していくのです。そういう問題をひっさげていかなければならない。そういう問題はどうでもいいと言うの

ではない。そういう問題に携わると言ふ立場を、明らかにするのが宗教なのです。

宗教の問題が解決したら人生の問題がなくなるのではない。人生

の問題が初めて手をつけられるのです。

一步一歩苦しんで、眞面目に苦しんで、悩まなければならぬ問題に、我われがその一翼を荷負すことになるのです。それが業を果たすという意味なのです。

(『親鸞における人間学』)

ここに「問題」と「問題に携わる立場」という表現で自己(信心)と社会の関係が語られており、「それが業を果たすという意味」だと言わっています。

またかつて、「社会は自己の心の反映であり、社会改良は不要である」とされた曾我量深師の社会観から大きく展開していることを思います。

「人生の問題が初めて手をつけられる、一步一歩苦しんで眞面目に苦しんで……」というところに、現実が実感的に語られていて共感するわけです。

これらの問題の中で人間としてどう生きるか。真宗はどんな役割を果たすのか。寺の役割は……？。まずこんなことを、お互に真剣にじっくり語り合い学び合うことが、今とても大事だと思います。

(了)



柴田秀昭さん、石川正生さんから出された問題は、まだ多々あります。私が、私としては取敢えず以上のことを思いながら記してみました。

なお現代の問題として、私たち真宗人からも次のような諸問題が考えられます。

#### ◎現代の諸問題

- ①経済至上主義の中で
- ②科学技術至上主義の中で
- ③高度情報化社会の中で
- ④少子高齢化現象の中で
- ⑤人口移動・集中化と過疎化現象の中
- ⑥宗教離れ現象(傾向)の中で
- ⑦「家」の意味

研修会報告①

## 真宗教学講座「真宗の基礎」開催

【2013・12/25】

講師 池田 勇諦氏（同朋大学名誉教授）

会場 富山東別院会館



年の瀬が迫る十二月二十五日「真宗の基礎」と題して真宗教学講座が開催された。講師に同朋大学名誉教授の池田勇諦氏をお招きし、御遠忌を控えた我々に対し「私にとっての宗祖親鸞聖人とは?」という問いを投げかけて頂いた。そして、この問い合わせ前に「聞法心」について問題提起された。

「聞法」を考えると私は大谷専修学院時代を思い出す。会社員を辞め教師資格取得の為、とにかく早く真宗を理解しようと休日においても早朝から本山のお朝事に参詣し、その後高倉会館の日曜講演に足繁く聞法に通ったものだ。しかしそこで理解したことをいえば、私の自我関心の域を出ない論理的解釈のできることだけであった。それ以外の論理のカテゴリを超えた内容はほとんど耳に入つてこなかつたのである。

「仏法」は答えが用意されているような論理で解釈できるところだけに留まらない。教えに答えを求めるのではなく、教えから自分を問い合わせ返すのである。これは人から言われたことであるが、「仏法の話を聞く」と「仏法を聞く」は全然違う。これは「聞法」の姿勢であり「仏法の話を聞く」は私の中の善惡の分別心を持って「私が仏法を聞く」という姿勢である。そうではなく「仏法を聞く」は法によって私が知らされていく、私自身が顕かにされるという

「仏法に私を聞く」という姿勢である。主体は「私」ではなく「法」である。このスタンスを間違えると、どこまでいっても表面的な感想や批評を繰返すだけで流転するのである。御遠忌を通して今一度自分の中の問

題で、読んだまま他教区から人が集まり、決められたテーマについて一泊二日の日程で学ぶのである。今回は、前回の大坂と同じ差別問題を取り上げた。参加者は四十五人程。訓覇浩氏の講義を聴講し、その後各班に別れて座談。二日目も同じ感じである。

今回で六回目になる「他教区交流研修会」。研修会報告②

研修会」。読んだまま他教区から人が集まり、決められたテーマについて一泊二日の日程で学ぶのである。今回は、前回の大坂と同じ差別問題を取り上げた。参加者は四十五人程。訓覇浩氏の講義を聴講し、その後各班に別れて座談。二日目も同じ感じである。

研修会報告②

## 「他教区交流研修会 in 富山」開催

【2/3~4】

講師 訓覇 浩 会場 富山東別院会館

私にかなり強く残った。

座談の中で、問い合わせにならぬ、差別されている人の顔が見えてこない現状、あまり自分達には関わらない、等々の意見がでた。講師より「相手が解放される事を自分の喜びと出来るのか」と言われて、私自身考えさせられた。



講義の中で「親鸞さんを一言で言つたら首飛ぶ念佛した人だ」と言われ、また「共に解放されていく事が大事で、我らという世界が開く事で最後に救われる道である」という言葉がありをみつめなおしてみようと思う。

第九組 永源寺 島倉慶晃

また、参加者全員で「きときと座談会」と題し、疑問に思つた事や、講師の目に止まつた感想について話し合つた。いつも顔を見ている人達と違い、他教区の方から違つた意見を聞いたり、新しい発見も多々ありました。しかし、全体の座談会では活発な話し合いにならなかつたのが、私自身は残念に思つた。

しかし、この企画を立ち上げ形にしたスタッフの皆さん、そして参加者の皆さんあつての事であり、この場を借りてありがとうございましたと感謝を述べたい。この企画は有志の集まりなので長く続けて、他教区の人達との繋がりの場になつて頂きたいなと思つた。

第十一組 岩隆寺 金山哲成

研修会報告③

## 「青少年のつどい」開催

会場 富山別院・東別院会館・立山山麓スキー場

【2／15～16】



去る一月十五日、私は教区の「青少年のつどい」に参加しました。今年はスタッフの方が参加者より多かったので、一人一人とより深く向き合うことができたと思います。全二日の日程で、初日は別院で過ごし、二日目は立山山麓スキー場でスキー・スノーボード教室を行いました。

私は初日だけの参加でした。子供たちは開会式が始まる前から早く遊びたいように見え、この日をとても楽しみにしていたのだと思いました。別院ではホットケーキを作ったり、廊下で行うカローリングや紙ヒコーキ飛ばし、ストラ

の大切さを、子供たちの笑顔から教えてもらったと思います。

第十二組 勝樂寺 藤田 徹

ツクアウトなどをして、全員がとても楽しそうに遊んでいました。また、お夕事の際は、とても大きな声でおしゃべりをしています。一人一人とより深く向き合うことができたと思います。全二日の日程で、初日は別院で過ごし、二日目は立山山麓スキー場でスキー・スノーボード教室を行いました。

「青少年のつどい」は短い時間ですが、それぞれ個性を持つ子供たちが協力し合い、理解しながら仲良くなっていく様子が感じられました。

今回の参加で、私は人と人との繋がりと、そこから生まれるふれあい

も楽ししました。また、勤めをしていました。色々な遊びや活動を通じて、皆が仲良くなっています。このを感じました。

「青少年のつどい」は短い時間ですが、それぞれ個性を持つ子供たちが協力し合い、理解しながら仲良くなっていく様子が感じられました。

教勢調査を担当する寺林脩統計調査専門員から、「教勢調査」から見る宗門の現状を元に宗門の教勢の全体像について講義がなされた。特に教勢の下降傾向の項目が多くなっているのに対して、教勢の上昇傾向の項目が少ない点について触れられた。

富山教区については、全体的に下位グループに属している項目が多いが、前回の調査から上昇している項目については、今後も上昇へ向けて取り組むことが必要であることを話された。

講義後、参加者からは「門徒の葬儀・法事の回数が減った」設問に対する質疑応答がなされた。寺林専

研修会報告④

## 富山教区「教勢調査」報告学習会開催

寺林 健氏（元大谷大学教授・宗教社会学）会場 富山別院本堂

【4／16】

門員は「現在は葬儀がほとんどゼレモニー会館で行われているが、やはりお寺の本堂で執行すべきである」と述べられ、今後の教化活動の展開を考えさせられる学習会であった。

富山教務所





## 今回の紹介は、第十二組 養照寺

### 発足四十年を迎えた声明会

ここ養照寺では、四十年前から「養照寺声明会」という名のもとに毎月二十七日の晩、本堂での集いを開いてまいりました。

現在は夜の七時三十分から九時迄（冬期は七時から八時三十分）の一時間半の時間枠の中で、

前住職の残された記録によると、始まり（昭和四十年代初頭）は御門徒の方々を中心に行なわれた。同朋奉讃の稽古をしたり、人生の喜びや悲しみについて気軽に話し合う場を作ろうということだったようです。

やがて、来会者が増えるに従って、昭和五十年一月二十七日、正式に「養照寺声明会」として発足。初代会長には、当時還暦を迎えたばかりの長谷川一郎さん（門徒総代）、そして文字通り「声明の稽古」には明願寺住職の二上斎さんに御指導をお願いしました。また、会長さん以下事務局の方々の努力もあり、一時は会員数が五百名を超えるという盛況を呈していました。とは言つても実際に例会に足を運ばれるのは百人前

最初に正信偈同朋奉讃のお勤めがあり、その後「誕生会」に移ります。これは会員の皆さんの中での誕生日をお迎えの方々に予め案内の葉書を差し上げておき、例会当日にお一人ずつお名前を読み上げます。そこでご本人に会長さんがお祝いの品を手渡すのと同時に出席の皆さん

お招きしてお話を聴く会として、会長さんの挨拶の後に五十分程の時間を設けてあります。他にいくつかの年中行事があり、五月の旅行、七月の曉天講座、八月の会員物故者追悼法要等々です。

なあ、当声明会では、



十年毎に「しうみよ」と題した記念誌を発行しております。前回刊行された三十年記念誌には、当時の会長

「私たちには産まれる日時や場所、男性か女性かなど、命のはじめから最期まで何一つ自分で選ぶことができません。もし選ぶことが出来るとしたら、それは『自分自身の生き方』なのではないでしょうか。幸い私は声明会のたくさんの行事を通して『仏のことば』を聞き『人の生死』『豊かな心の在り方』などについて考えさせていただく機会をもつております。このことは人としての生き方を学ばせていただいていることになります。現状のように各地で争いの絶えない不安の多い時だからこそ声明会の存在がますます必要なだと思われるのです。」



## 離任のご挨拶



岡崎教務所長  
三河別院輪番 辻森 正顯

教区の皆様におかれましては、平素より法義相続・本廟護持にご尽力を賜っております。

このたび、六月三十日付をもちまして岡崎教務所長兼三河別院輪番を拝命し、過日着任いたしました。

顧みますれば、二〇一一年七月に就任して以来三年間、皆様方の一方ならぬご厚情とご指導のお陰をもちまして、及ばずながら勤めさせていただきましたこと衷心より御礼申し上げる次第です。

わけても、皆様とともに、富山教区・富山別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を厳修させていただくご縁を賜りましたことは、これまでの宗務役員人生の中で、いや生涯忘ることの出

来ない大きな慶びとなつたことでござります。

新任地におきましては、御地でお育ていただきましたことを糧として、一層精進いたす所存でありますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げまして、離任のご挨拶といたします。

## 着任のご挨拶



富山教務所長  
富山別院輪番 龍渕 卓

教区の皆様に

は、常日頃教化推進にご尽力いたしております。

最後に、今後はより一層聞法精進し、宗祖のお心を深くいただいてまいりたいと存じます。

にありがとうございました。

この六月三十日付で富山教務所長並びに富山別院輪番を拝命しました。年だけ重ね、いまだ浅学菲才のものであり、まして別院輪番は初めての経験でありますので、なにとぞよろしくお願ひいたします。



さて、教区・別院におかれでは去る五月に宗祖御遠忌法要を厳修され、見事円成されましたことは、まことにご同慶の至りに存じます。中でも、多くの方が関わって取り組まれた「百人百話」事業は、総参加者数が五千名を超えるという盛況のうちに進められ、多くの課題が確認されたと報告を受けました。そして、この取り組みを一過性のものとせず、何とかつなぎ、そのために知恵を絞っていこうとの強い意欲が伺われたことは、今後の教区の方向性を示唆しているものと受け止めさせていただきました。

二〇一三年度宗派経常費を御完納いたしました。そこで、ここに完納寺院をご披露し、御礼にかえさせていただきます。

(二〇一三年七月一日～二〇一四年六月三十日)

## 宗派経常費 完納御礼

### 第九組

西光寺

光圓寺

西光寺

中堂寺

寶林寺

寶堂寺

永源寺

西圓寺

善通寺

禮行寺

速成寺

本覺寺

護念寺

深妙寺

樂圓寺

慶正寺

尊光寺

康樂寺

圓龍寺

長光寺

圓命寺

正覺寺

覺證寺

聞成寺

蓮照寺

福恩寺

明休寺

正覺寺

永福寺

應聲寺

淨行寺

慶念寺

信願寺

今漢寺

滿念寺

見義

常念寺

安正寺

覺順寺

正源寺

專福寺

善教寺

善性寺

德運寺

報光寺

本行寺

了照寺

蓮光寺

西元寺

淨光寺

乘善寺

## 教区だより

長福寺	傳長寺	持專寺	念法寺
誓願寺	真行寺	勝光寺	真成寺
西源寺	照念寺		
第十一組			
稱永寺	真證寺	專廣寺	養照寺
專入寺	西光寺	廣際寺	本廣寺
教正寺	西光寺 <sup>(大浦)</sup>	光念寺	善行寺
入覺寺	正樂寺	佛念寺	立尅寺
圓照寺	竹願寺	光德寺	玉永寺
善覺寺	正專寺	稱念寺	淨誓寺
淨德寺	光顯寺	圓滿寺	本敬寺
松林寺	安養寺	真敬寺	圓常寺
淨信寺	淨教寺	無量寺	淨惠寺
等通寺	通寶寺	光蓮寺	光明寺
本誓寺	正恩寺	常念寺	照光寺
願成寺	祐教寺	岩隆寺	
第十二組			
託法寺	神久寺	円覺寺	常念寺
長圓寺	常德寺	圓乘寺	光曉寺
勝樂寺	等覺寺	敬恩寺	唯信寺
安成寺	照善寺	大德寺	榮明寺
真宗寺	相順寺	則善寺	佛現寺
得性寺	勝福寺	光德寺	得念寺
願宗寺	正信寺	得念寺	
本傳寺	西照寺	淨永寺	
法潤寺	辻德法寺	明源寺	心行寺
願蓮寺	長安寺	善念寺	長寶寺
願生寺			

## 教區役職者の改選

(敬称略)

第九組	本覺寺	藤岳	貴之
第十組	中堂寺	五十嵐淨和	
第十一組	應聲寺	和田 度	
第十二組	淨誓寺	福井 修	
第十三組	長寶寺	中山 順雄	
西心寺	中山 順雄		
田中			
慶視			

## 教區會議長

第九組 本覺寺 涙上 一知

第十一組	本傳寺	渕上	一知
第十二組	無量寺	竹澤 文秀	
第十三組	勝樂寺	藤田 薫	
第十四組	圓林寺	林 了真	
第十五組	勝蓮寺	河村 智明	

## 教區教化委員会

(任期 二〇一四年七月一日～二〇一七年五月三十日)  
〈組織拡充小委員会〉

幹事

第十二組 本傳寺 涙上 一知

第十組	中堂寺	五十嵐淨和	
第十一組	應聲寺	和田 度	
第十二組	淨誓寺	福井 修	
第十三組	長寶寺	中山 順雄	
西心寺	中山 順雄		
田中			
慶視			

## 副組長

(任期 二〇一四年四月一日～二〇一七年三月三十日)

第十組	正覺寺	犬島 孝昭
第九組	中堂寺	五十嵐淨和
第十一組	無量寺	竹澤 文秀
第十組	永宗寺	永崎 晓
第九組	西元寺	神保 覚央

## 同補充員②

第十組	樹德寺	養照寺	重願寺	明願寺
專德寺	淨慶寺	佛性寺	持專寺	
圓林寺	光誓寺	明榮寺	雲龍寺	
善龍寺	光泉寺	念興寺	興行寺	
西養寺	圓照寺	大安寺	明誓寺	

第十組	輪覺寺	常光寺	勝蓮寺	蓮通寺
真友寺	光榮寺	榮顏寺	西心寺	淨圓寺
西順寺	光照寺	改觀寺		

第十組	正覺寺	犬島 孝昭
第九組	中堂寺	五十嵐淨和
第十一組	無量寺	海野 啓良
第十組	養照寺	藤谷 恵
第十二組	勝樂寺	竹澤 文秀

## 選出教區會議員

(二〇一四年四月二十四日～二〇一七年四月二十三日)

第十三組	持專寺	大伴 修一
第十二組	安成寺	塚本 正明
第十一組	常泉寺	心行寺 名越 哲
第十組	常泉寺	長等 兼昭
第九組	正覺寺	犬島 孝昭

## 監事(教区内住職より一名)

(二〇一四年四月二十四日～二〇一七年四月二十三日)

第十三組	持專寺	大伴 修一
第十二組	安成寺	塚本 正明
第十一組	西光寺	森 琢雄
第十組	常泉寺	長等 兼昭
第九組	正覺寺	犬島 孝昭

## 巡察委員(神涼正昭氏ご逝去に伴う改選)

(任期 二〇一四年一月二十日～二〇一四年九月三十日)

第十三組	持專寺	大伴 修一
第十二組	安成寺	塚本 正明
第十一組	西光寺	森 琢雄
第十組	常泉寺	長等 兼昭
第九組	正覺寺	犬島 孝昭

## 教區教化委員会

(任期 二〇一四年七月一日～二〇一七年五月三十日)  
〈寺族研修小委員会〉

幹事

第十二組 本傳寺 涙上 一知

第十組	中堂寺	五十嵐淨和	
第十一組	應聲寺	和田 度	
第十二組	淨誓寺	福井 修	
第十三組	長寶寺	中山 順雄	
西心寺	中山 順雄		
田中			
慶視			

## 門徒研修小委員会

副幹事  
第十二組 安成寺 塚本 正明

幹事	第十組 長龍寺 松本 弘行	第十二組 光德寺 新田三千代
副幹事	第十三組 明光寺 野田 博俊	第十一組 長圓寺 池原 充
幹事	第十二組 明源寺 辻 明浩	「青少年教化小委員会」
副幹事	第十組 善久寺 吉崎実喜子	（一〇一四年二月二十八日）
幹事	第十三組 持専寺 大伴 慎介	第十二組 常念寺 寺田 和之
副幹事	第十組 覚順寺 信耀 祐顯	（一〇一四年三月二十五日）
幹事	第十二組 榮明寺 佐賀枝 立	（一〇一四年五月二十八日）
副幹事	第十組 真行寺 杉森 達朗	（一〇一四年六月二十九日）
第十組 等通寺 高谷 純夫	第十一組 佛念寺 神涼 昭夫	（一〇一四年六月二十八日）
第十組 傳長寺 江本誠一郎	第十二組 淨永寺 長井 宗路	（一〇一四年六月三十日）

## 得度式受式

### 教務所人事異動

（一〇一四年一月一日～一〇一四年六月三十日）

教師入位	第十組 傳長寺 江本誠一郎	第十組 傳長寺 江本誠一郎
	（一〇一四年一月一日～一〇一四年六月三十日）	（一〇一四年一月一日～一〇一四年六月三十日）
	第十組 傳長寺 江本誠一郎	第十組 傳長寺 江本誠一郎
	第十組 寶藏寺 藤谷 弘照	第十組 寶藏寺 藤谷 弘照
	（一〇一四年三月十九日）	（一〇一四年三月十九日）
	第十組 傳長寺 月見 仁士	第十組 傳長寺 月見 仁士

第十二組 光德寺 新田三千代  
第十一組 長圓寺 池原 充

## 教化日誌

（一〇一四年一月一日～一〇一四年六月三十日）

1月	14日	解放運動推進協議会公開講座 【真宗と人権】
	17日	「女性によるおつとめ」声明講習会③
	21日	「女性によるおつとめ」声明講習会④
	23日	准堂衆講習会
	27日	第一組組会・組門徒会 坊守会報恩講
	29日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑤
	31日	第九組組会 第十組組会 『御遠忌通信』（一〇一四年一月）発行
2月	3日	御遠忌「オーピニングセレモニー」 （百人百話スタート）
	4日	若坊守学習会 【講師 三明智彰氏】
	5日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑩
	6日	大谷大学同窓会役員会 「女性によるおつとめ」声明講習会⑪
	7日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑫ 御遠忌讚仰講演会
	8日	（女性によるおつとめ） 【講師 川村妙慶氏】
	9日	北陸連区教務所長・主計会 『如大地』編集委員会 （高岡教区仏青主催）
	10日	富山県真木下大谷派教誨師会臨時総会 東日本大震災復興支援講演会
	12日	北陸連区教務所長・主計会 『如大地』編集委員会 （高岡教区仏青主催）
	13日	（高岡教区仏青主催）
3月	1日	研修部長 龜渕 卓 富山教務所長に任命する
	2日	富山別院輪番の兼務を命ずる 三河別院輪番の兼務を命ずる
	3日	富山別院輪番 辻森 正顯 岡崎教務所長に任命する
	4日	他教区交流研修会in富山 【講師 訓霸 浩氏】
	5日	北陸連区差別問題研修会事前協議会
	6日	こどもまつり全体会 【女性によるおつとめ】声明講習会⑥
	7日	第十二組組会 第十三組組会 『如大地』編集委員会 （高岡教区仏青主催）
	8日	（女性によるおつとめ） 【講師 木越 康氏】
	9日	共学公開講座 坊守聞法講座
	10日	全国教化委員長会 （富山別院・立山山麓スキー場）
	11日	青少年のつどい
	12日	研修部長 龜渕 卓 富山別院輪番の兼務を命ずる
	13日	富山教務所長に任命する
	14日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑦
	15日～16日	青少年のつどい （富山別院・立山山麓スキー場）
	17日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑧
	18日	住職総合研修 【講師 石川了英氏】
	19日	坊守聞法講座
	20日	御遠忌法要委員会教化推進部会 坊守聞法講座
	21日	御遠忌法要委員会総会 御遠忌法要委員会研修会
	22日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑨
	23日	北陸連区教務所員研修会 御遠忌法要委員会研修会
	24日	御遠忌法要委員会教化推進部会 坊守聞法講座
	25日	御遠忌法要委員会教化推進部会 坊守聞法講座
	26日	御遠忌法要委員会教化推進部会 御遠忌法要委員会研修会
	27日～28日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑩
	29日	北陸連区教務所員研修会 御遠忌法要委員会研修会
	30日	御遠忌「オーピニングセレモニー」 （百人百話スタート）
	31日	若坊守学習会 【講師 三明智彰氏】
4月	1日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑪
	2日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑫
	3日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑬
	4日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑭
	5日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑯
	6日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑰
	7日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑱
	8日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑲
	9日	「女性によるおつとめ」声明講習会⑳
	10日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉑
	11日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉒
	12日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉓
	13日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉔
	14日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉕
	15日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉖
	16日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉗
	17日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉘
	18日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉙
	19日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉚
	20日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉛
	21日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉜
	22日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉝
	23日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉞
	24日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉟
	25日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉟
	26日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉟
	27日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉟
	28日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉟
	29日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉟
	30日	「女性によるおつとめ」声明講習会㉟

			31日	富山・高岡教区会議員懇談会 (富山当番)
			31日～4月1日	児連子ども交流会
		4月	9日	正副組長会
		10日	10日	儀式作法講習会(第一回)
		11日	14日	児連手づくりおもちゃの講習会 【講師】田中世津子氏
		15日	15日	御遠忌法要委員会教化推進部会 若坊守役員会
		16日	16日	第二回選挙管理会 富山教区「教勢調査」報告学習会 【講師】寺林脩氏
		17日	18日	割当審議委員会 『如大地』編集委員会
		19日	21日	富山教区・富山別院宗祖親鸞聖人 七百五十回御遠忌法要厳修
		20日	22日	儀式作法講習会(第一回) 御遠忌法要委員会本部会
		23日	24日	御遠忌法要委員会実行委員会 御遠忌法要委員会法要参拝部会
		25日	26日	ハンセン病問題ふるさとネットワ
	5月	1日	1日	北陸連区差別問題研修会 富山教区・富山別院宗祖親鸞聖人 七百五十回御遠忌法要厳修
	2日～3日	2日	28日	あいあう公開講座 『如大地』編集委員会 【講師】泉恵機氏
	4月	6日	6日	秋安居【講師】延塚知道氏 共学研修定期例学習会
	7日	7日	7日	第十三組同朋大会 【講師】木ノ下秀俊氏
	8日	8日	8日	第九組同朋大会 【講師】川村妙慶氏
	9日	9日	9日	門徒研修小委員会
	10日	11日	11日	共学研修定期例学習会 指導者研修会
	12日	13日	13日	富山解放連・第二十九回定期総会、記念講演会
	14日	15日	14日～15日	北陸連区差別問題研修会 富山教区・富山別院宗祖親鸞聖人 七百五十回御遠忌法要厳修
	16日	17日	15日	第十二組同朋大会 【講師】木村宣彰氏
	17日	18日	16日	保護司会総会 【講師】スザン・ドミンゴス氏・大島義男氏
	18日	19日	17日	『如大地』編集委員会 【講師】スザン・ドミンゴス氏・大島義男氏
	19日	20日	18日	諸宗教対話 社会教化小委員会 第十組同朋大会 【講師】スザン・ドミンゴス氏・大島義男氏
	20日	21日	19日	共学研修定期例学習会 社会教化小委員会 第十組同朋大会 【講師】宮下晴輝氏
	21日	22日	20日	ピースコンサート 第十一組同朋大会 【講師】蓑輪秀邦氏
	22日	23日	21日	北陸連区教務所長会 御遠忌法要委員会教化推進部会 御遠忌法要委員会法要参拝部会 坊守会総会 【講師】蓑輪秀邦氏
	23日	24日	22日	北陸連区教務所長会 御遠忌法要委員会教化推進部会 御遠忌法要委員会法要参拝部会 坊守会総会 【講師】蓑輪秀邦氏
	24日	25日	23日	北陸連区教務所長会 御遠忌法要委員会教化推進部会 御遠忌法要委員会法要参拝部会 坊守会総会 【講師】蓑輪秀邦氏
	25日	26日	24日	北陸連区教務所長会 御遠忌法要委員会教化推進部会 御遠忌法要委員会法要参拝部会 坊守会総会 【講師】蓑輪秀邦氏
	26日	27日	25日	北陸連区教務所長会 御遠忌法要委員会教化推進部会 御遠忌法要委員会法要参拝部会 坊守会総会 【講師】蓑輪秀邦氏
	27日	28日	26日	北陸連区教務所長会 御遠忌法要委員会教化推進部会 御遠忌法要委員会法要参拝部会 坊守会総会 【講師】蓑輪秀邦氏
	28日	29日	27日	北陸連区教務所長会 御遠忌法要委員会教化推進部会 御遠忌法要委員会法要参拝部会 坊守会総会 【講師】蓑輪秀邦氏
	29日	30日	28日	北陸連区教務所長会 御遠忌法要委員会教化推進部会 御遠忌法要委員会法要参拝部会 坊守会総会 【講師】蓑輪秀邦氏

**編集後記**

最近あった出来事から気付かされた事が二つ程あった。

一つは、朝の情報番組で、「業界雑誌」を紹介するコーナーが放送されていた。それは業界の人以外は全く目にする事が無い、特化された雑誌の編集風景と雑誌の内容等を紹介するものであった。そこで「月刊住職」という業界雑誌が紹介された。それは私も購読している雑誌であり、雑誌の記事に対するアンケートたちの反応を興味深く見ていると、予想以上の反応があり、一般人が寺の内情に興味を持っている事に驚いた。

若い人や寺とかかわりを持ついない人は寺に興味が無いと思っていたが、実はそうでもないという事が付けられた。

もう一つは、「如大地」今号にも取り上げた「百人百話」についてである。その「百人百話」には、予想以上に多くの方の聴聞があったという事だ。それを聞いて、ある会社の社長の言葉を思い出した。それは、「新」という字は、立つ木に斤を入れると書く。既存にある物を変化させることによって、新しいモノが生まれる」という言葉だ。寺には自分が見落としている有形・無形の財産があり、それを変化させることによって新しいものが生まれる可能性がある、という事にあらためて気付かされたような気がする。

# 富山教区・富山別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要

—2014年5月23日から25日まで—



皆さまの御懇念・御協力を賜り、御法要の円成となりました。衷心より御礼申し上げます。

教区・別院 御遠忌法要委員会

